

アクターネットワーク論の考え方

——地震の社会学(四)——

原 田 隆 司

ブルノー・ラトゥール「あなたは、ものごとをやさしくは表現してくれないんですね」
ミッシェル・セール「ものごとというものは、それ自体、やさしいものなんですか」
(Series 1992: 114 = 112)

本稿では、アクターネットワーク論 (Actor Network Theory) 以下では ANT と略す) について考えてみたい。筆者がこれまで論じてきた地震に関する考察において手がかりとしてきたものである。

一、アクターネットワーク論とは何か

——一、概観

アクターネットワーク論には三人の中心人物がいる。ミッシェル・カロン (Michel Callon)、ブルノー・ラトゥール (Bruno Latour)、ジョン・ロウ (John Law) である。三人は、個別の分析のなかで ANT の考え方を説明しているだけでなく (Callon 1986 a, 1986 b, 1999, Callon and Latour 1981, Latour 1988, Law 1986, 1992)、ANT という考え方そのものを論じた論文や著書も出している (Callon 2001, Latour 1999, 2005, Law 1992, 1999, 2006, 2009)。

最初に、カロンによる ANT の定義をみておこう。

actor network theory (ANT) は、アクターとネットワークという普通に考えれば対立すると受け止められる二つの言葉を結合したものである。主体と構造と

か微視的分析と巨視的分析といった社会科学の中心に位置していた古い伝統的な緊張関係を思い出させるものかもしれない。しかしながら、ANT は、翻訳の社会学という形でも知られているが、そうした古典的な対立を理論的あるいは弁証法的に示そうという試みではない。それとはまったく逆に、ANT の目的は、そうした対立がどのように構成されたのかを示すことであり、その過程を分析する道具を提供しようとする。ANT の中心的な仮定のひとつは、社会科学が通常「社会」と呼んでいるものは、絶えず続いている達成 (achievement) であるということである。ANT は、社会というものが常に更新されている過程そのものを説明するための分析の道具を提供する。他の構築主義との違いは何かといえば、社会がカタチづけられているところで科学と技術が重要な役割を果たしているということである (Callon 2001: 62)。

伝統的、古典的な社会学の考え方とは逆に、過程としての社会、科学と技術の役割の重要性、そして翻訳など、ANT の基本的な姿勢がここに表現されている。なお、カロンは、この文章をフランス語でも発表しているが、英語の actor network theory をフランス語では la Sociologie de l'acteur réseau (SAR) と表記している (Callon 2006: 267)。

ANT の歴史的な流れを知るためには、今のところ、ジョン・ロウが社会学理論の事典に寄稿したもの (Law 2009) が最適である。

ロウによれば、ANT の考え方は一九七八年から一九八二年にバリではじまったという。ラトゥールは一九七五年から七七年まで、カリフォルニア州サンディエゴのソーク研究所で調査を行い、それをもとに『実験室の生活』(Latour and Woolgar 1979) を出版した。ロウによれば、ラトゥールは「グレマスの研究とエスノメソドロジを参考にして、科学における真理の主張を導く実践についての記号論を展開した」(Law 2009: 144)。カロンが考案した ANT という言葉は一九八二年前後から出てくるという。社会学理論の事典では「後に ANT で使われることになる鍵概念の多くはカロンとラトゥールの一九八一年の論文で初めて系統的に使用された」と説明されている (Bary 2006)。これは二人の論文 (Callon and Latour 1981) を指している。以上のような指摘から、ANT の考え方は、一九八〇年前後にまで遡ることができるといえるだろう。⁽¹⁾

一―二、ホタテ貝の養殖―アクターネットワーク論の一例

ANT はどのような考え方をするのか。ここでは、カロンの論文 (Callon 1986) を検討してみたい。

取り上げている出来事は比較的簡単なものである。フランスのある港で、ホタテ貝の養殖が試みられた。そして、最初はうまくいったが後には失敗した、というものである。カロンは、この簡単な出来事を複雑に記している。

最初に背景が説明される。フランスではホタテ貝は人気料理であるが、産地は限られており、水揚げすれば売れる。一九七〇年代のはじめ、主産地のプレストでは冬の水温の低下と乱獲で繁殖率が落ちた。カロンが描く物語の舞台はサンブリューという別の漁港である。一九七二年から一〇年かけて、ここでホタテ貝の養殖が確立された。カロンが分析しているのは、この一〇年間の「進化」のうちの最初の部分である。カロンは、分析の対象は「科学的知識が確立されることをとおして展開される新たな社会関係」であると述べている (Callon 1986: 202)。

発端は、一九七二年に主産地プレストで開催された会議である。カロンは次の三

点に注目する。第一点は、研究者と漁民の代表が集まりホタテ貝の養殖が議論され、三人の研究者が日本を訪問して感銘を受けた養殖技術を紹介して注目された、ということである。養殖の方法は、稚貝を海中の付着機に入れ、天敵のヒトデから守り、生長すると海底に地まき放流をして、二、三年後に出荷する、というものである。三人の研究者は、この方法をサンブリュー湾に導入したいと考え、会議で話すだけではなく、報告書や論文も公表した。二点目は、この段階では、漁師も三人以外の研究者も、ホタテ貝の生育について何も知らなかった、ということである。漁師は成長した貝を底曳網で捕獲するだけである。つまり、「漁師とホタテ貝の間には、直接的な関係はなかった」(Callon 1986: 202)。三点目は、主産地のプレスト同様に、サンブリュー湾でもホタテ貝が獲れなくなるのではないか、という不安が生じていたことである。本論の前提ないし背景として説明されているのは以上のようなことである。

続いて、カロンは、ひとつのアクター (actor) を追うと述べている。それは三人の研究者である。この論文で分析対象にしているのは、かれらがホタテ貝の養殖を試みた最初の時期だけである。この試みは、実際には重なり合っているが、四つの局面 (moments) からなっている、とカロンは述べる。四つの局面を合わせてひとつの「翻訳 (translation)」であると書いている。この翻訳という過程において、「複数のアクターは相互に何が何であるのかというアイデンティティや、相互作用ができるのかどうか、それぞれの策略にどれくらい余裕があるのか、といったことがやりとりされ、アイデンティティや相互作用や策略の輪郭というものができあがる」(Callon 1986: 203)。

次に、四つの局面が記されていく。第一の局面は「問題の明確化 *problematisation*」である。三人の研究者にとつての問題は、日本での養殖の方法がサンブリュー湾で通用するのか、ということであった。日本とフランスではホタテ貝の種類が違うのである。細かくいうと、稚貝はいつ貝のかたちに変態するのか、生存率はどれくらいなのか、湾のなかに十分な数の付着機を沈めることができるのか、といったことである。三人の研究者がこうした問題を提示したことにより、この物語には、他の三つのアクターが入ってくる。それが、ホタテ貝、サンブリュー湾の漁

民、同僚の研究者たち、である。いずれも、三人の研究者が報告書で「定義」しているものである。

まず、サンブリュー湾の漁民は、獲れる限りのホタテ貝を水揚げしている。現状のままであれば、自滅することになるが、「長期的な利益」というものを理解していて、ホタテ貝を増やす養殖に関心を持ち、そのための研究者たちの試みを認めているアクターとされる。

次に、同僚の研究者たちは、ホタテ貝についてもサンブリュー湾のことについても知らないが、新しい知識を前進させることには関心を持っている、とみなされている。

そして、サンブリュー湾のホタテ貝は、三人の研究者からみれば、日本と同じように、稚貝の段階で自分の生存のために海中の付着機に沈むことを「受け入れる」はずだ、とカロンは書いている。

こうして、問題は明確になってくる。三人の研究者というひとつのアクターが養殖を試みたいと働きかけることで、漁民も同僚の研究者もホタテ貝も、そして三人の研究者自身も、フランスのサンブリュー湾でホタテの稚貝が海中の付着機に入る、という一点をめぐって、相互に関係をもつようになる。いわゆる社会的世界と自然的世界の両方の要素が、この相互関係には含まれる、とカロンは述べる。ホタテ貝は自分の生存のために、同僚の研究者たちはホタテ貝に関する知識を前進させるために、漁民は長期的に儲けるために、というように、それぞれが利益を持つという関係である。こうして問題が明確になり、アクターたちが相互に関係をもつようになる。もちろん、この段階では、この相互の関係がうまくいくかどうかは不明である。

第二の局面は、利益配分と協力関係が固定するという局面である。アクターそれぞれのアイデンティティは独立に形成されるのではなくて、行為のなかで形成される。三人の研究者は、日本の養殖技術に魅了されていた。錨で固定された引き綱から付着機が下がっている。その中に網の袋があり、稚貝はそこで成長する。海水が自由に流れ、稚貝も動くことができる。しかし、綱から出ることはなく、ヒトデなどの天敵からも守られ、海流にも流されず、そして底曳網漁で漁民に捕獲されるこ

ともないのである。つまり、この養殖の装置は、ホタテ貝にとっても、三人の研究者と同様に、利益をもたらすことが明確になった、とカロンは指摘する。一方で、三人の研究者は、同僚の研究者や漁民には文書や会話をを用いて訴えた。同僚の研究者に対しては、装置よりも、サンブリュー湾のホタテ貝の減少ということと、日本での養殖の「めざましい成果」、さらには、ホタテ貝の研究はこれまで手付かずであったこと、を訴えることが有効であった。こうして三つのアクターそれぞれが、利益配分を受け入れて協力することで、三人の研究者というアクターの試みに「従う」ことになった。

第三の局面は、役割の定義と協力、つまりメンバーになる過程である。実験がはじまるとホタテ貝の稚貝は、簡単には付着機に沈まなかった。潮流や寄生物という敵対勢力が存在したのである。報告書には「寄生物によってホタテ貝の量は変わる。また、見学者によって事故が起きたり、綱の場所が変わったり、付着機同士が絡んだりする。ホタテ貝は刺激があると敏感に反応して、離れてしまう」と記されていた。付着機を沈める深さの問題があり、その素材が藁などの植物性であれば海水の流れを妨げる。以上のことは、ホタテ貝の役割に関する問題である、とカロンは述べている。ここで、三人の研究者は同僚の研究者というアクターとの取引も行った。稚貝が沈まない付着機も出てきて、日本ほどの良い結果が出てこなかったのだが、三人の研究者は、同僚の研究者に、フランスでもホタテ貝の稚貝は付着機に沈む能力をもっている、と認めてもらうことができた。漁業者の代表とは取引の必要はなかった。かれらは実験を受け入れており、その結果を待っていたのである。

こうして三人の研究者は、三つのアクターとの交渉を通して、ホタテ貝には沈下すること、同僚の研究者には日本から持ち込んだ方法が正当な方法であると認めること、漁民はこの方法で湾のホタテ貝が増えるということを認めること、という役割を定義することができた。

第四の局面は、協力関係が動き出す、という局面である。ここで大切なのは、「実際に関わっているのはごく少数の人間にすぎない」ので、「誰が誰を代表しているのか」ということである、とカロンは指摘する (Callon 1986: 214)。ホタテ貝は

「沈黙したまま」である。三人の研究者は付着機に付いた稚貝の数を数えて論文に記載し、会議で報告し、ホタテ貝の代弁者になるのである。「ホタテ貝は沈下する」「漁民もサンブリー湾でホタテ貝が増えてほしいと考えている」と、三人の研究者は語り、行動する。かれらは自分たちの考える方向に他のアクターを動員することができたのである。実験の結果は、わずかの数の図表として印刷されて、数えられるほどの人しか参加しない会議で議論される。ここには「ホタテ貝、漁民、研究者という数え切れないほどの数の声を出さないアクターが関わっている」とカロンはいう。このように分析することで、自然と社会を区別せずに「対称性は完全である」という。

以上のようにして、「四つの局面を経て、関係性のネットワークができあがった」(Callon 1986: 218)。ところが、「一年、一年が経過して、実験の結果は破滅的なものになった」。付着機の中は空っぽになったのである。稚貝は水中に沈むものの、付着機には付かなかったのである。三人の研究者は、海水温の問題、予期しなかった潮の流れ、寄生生物、伝染病などを原因として説明した。付着機に付かなかったということは、すなわち、諸アクターが結びついた関係性のネットワークから、まずホタテ貝が「離れた」ということである。最初の年に付着したのはホタテ貝の稚貝の代表ではなかったのだろうか、とカロンは指摘する。そして、クリスマスイブの日に、何人かの漁民たちが、付着機の外のホタテ貝を獲ってしまったのである。漁民の代表者が関わっていた実験を、この何人かの漁民たちは尊重しなくなったのである。こうして三人の研究者の戦略は動揺し、同僚の研究者たちも懐疑的になる。三人の研究者は、ここまでつくってきた利益配分の方法を変形しなければならぬことになる。具体的には、漁師を説得する、他の方法を選ぶ、別の代表者を出す、などである。以上で、カロンは、このホタテの養殖の事例の分析を終えている。

この論文では、ホタテ貝の養殖という事例をはさんで、冒頭に論点が提示され、末尾で論点が整理されている。カロンは、次の三つを論点としている。まず、それまでの科学技術の社会学的分析では、「自然」と「社会」とを異なった基準で扱っていたのを「対称性」を維持したまま分析することである。それは、ホタテ

貝という人間以外 (non human) を漁民や研究者などと同様にアクターとして扱うということである。また、たとえば規範といったような社会的な判断をあらかじめ用意せず、分析対象のアイデンティティも保留したまま、分析をはじめという「不可知論」の立場をとるということである。社会的要因、制度や組織という説明を用いない。そして、自然と社会という区別をせずに、諸アクターが自由に作り出していく世界を説明する、ということである。こうした分析によって、カロンは、「あるアクターが他のアクターたちを従えるようになる権力関係 (power relationships)」というものは、社会と自然が絡みあった相互関係の複雑な網の目 network に依存する」と論じている (Callon 1986: 201)。

この分析で、アクターとその相互の関係としてのネットワークというのは、およそ以上のようなものであるが、もうひとつ重要なのが、翻訳 (translation) という考え方である。冒頭で、カロンは「翻訳の社会学」という枠組みを示し、それは権力関係をかたちづくる過程において科学と技術が果たす役割を分析するのに有効であることを示すことだ、と述べている。既にみてきたように、ホタテ貝の養殖という事例の場合には、四つの局面が翻訳という過程として論じられている。

以上が、カロンの論文の概要である。

二、アクターネットワーク論の主な概念

次に、ANTの鍵概念について考えてみたい。「アクター」も「ネットワーク」も、他の主要な概念も、それ自体はごく普通に使われる言葉であるが、そこにはいろいろな意味が込められている。

二一、アクターについて

アクター (acteur) という概念は、構造主義言語学の第一人者とされるグレマス (A. J. Greimas) が用いたものである。グレマスは一九六六年に『構造意味論』を出版した。久米博によれば、これは「構造主義諸科学の堅固な理論的基礎づけの書」として迎え入れられた (久米、一四五)。篠田浩一郎によれば、当時の記号学が記

号の表現と内容のうち、表現のほうに比重を置いていたのに対して、この本でグレマスは記号内容（意味）の構造分析を試みた。世界というものが私たちの前で「私たちを帯びる」のは、わたしたちがさまざまな「差異を知覚する」からである。この差異の知覚は、(一) 少なくとも二つの項（対象）を、同時に現前するものとして把握する、(二) 項と項の関係を把握し何らかのかたちで項と項を結びつける、ということによって可能になる。つまり「表意作用はひとつの項だけでは生まれず、関係の存在を前提とするものであり、二つの項のあいだの関係こそ表意作用に必要な条件であって、構造を成り立たせるものである」（篠田、一一〇—一一一）。

グレマスの著作は非常に難解だとされているが、昔話など物語の意味構造を整理した「行為項モデル」が知られている。この「行為項」とは *actant* の訳語である。グレマスは、物語のなかに、主体—客体、送り手—受け手、補助者—反対者という六つの「行為項（*actant*）」を区別した（Greimas 1986: 172-191 = 223-251）。

フレドリック・ジェイムソンは、物語の分析に関して、グレマスの枠組みを批判的に取り上げているのであるが、グレマスの *actant* について次のように説明している。「グレマスの『行為体』（*actant*）の概念は、物語の統辞構造（または「深層構造」とその「表層の」物語的言説との峻別にもとづいている。この表層の物語的言説においては、「演技者」もしくは認知可能な「登場人物」が、目にみえる単位となっている。いっぽう、『行為体』は、物語の連辞構造の機能で、必然的にもっとはるかに数に限られる。『行為体』は、グレマスによって一般的に三つのグループに還元される。すなわち、送り手／受け手、主体＝英雄／客体＝価値、補助者／悪者「反対者」、である（Jameson 1981: 109 = 626）。グレマスがやろうとしたことについて、ジェイムソンは、「旧来の、より具象的な物語理論が登場人物を重視していたのを、ずらすことにはかならなかった」と指摘する（Jameson 1981: 109-110 = 215）。そのために「基礎的な意味素の変形の『演算子（operator）』として『行為体』という新概念を提案」したのであり、それは「物語研究の脱擬人観化（*deanthropomorphization*）」に向けてのことである。しかし、ジェイムソンは、このことは結果として「核心部分」である『行為体』は「物語機能をひとりの人物のなす多くのおこないへと致命的に再変形（*retransform*）」してしまっていると指摘する。そし

て、このような擬人観的な人物像は、つねにこうした分析の理想である定式化には本質的に抗い、その定式化に還元されないのである」と批判する（Jameson 1981: 110 = 215-216）。とはいえ、ジェイムソンは「グレマスが物語の表層とその底にある行為体メカニズムとのあいだの分離を明らかにした」ことを評価する。「ひとりの登場人物が実は二つの別々の『行為体』のはたらきを包みかくしていることを示して、『登場人物』という表層の単位を分析的に分解しえたということ」である。これをジェイムソンは「X線透視の過程」と呼ぶ。つまりグレマスの枠組みは、それを用いて分析したときに「物語テキストがその基本的図式からなんらかの点で『逸脱＝漂流』するとき、生産的なものになる」のである（Jameson 1981: 112-113 = 220）。⁽²⁾

カロンは、先に紹介したホタテ貝の養殖の論文で、*actor* とは「記号論者が用いている *actant* の概念」のことであると記している（Calon 1986: 227 注 21）。ラトゥールも、後の著作では「英語のアクター（*actor*）」という言葉は人間に限定されることが多いので、人間以外を含む際の定義では、記号論から借りてきた *actant* を使う」と述べている。つまり、*actor* と *actant* は区別されずに使われていることになる。しかし、ラトゥール自身も、別の著作では、アメリカも、大統領も、帝国主義も、多くの兵士も、「国連から撤退したい」という記述はすべて同じ *actant* を示しているもので、それはちょうど、昔話で、同一の *actant* が魔法の杖や小人、妖精の意識をとおして行動するのと同じことである、と述べている。そして、ラトゥールは、ANT がこうしたフィクションの意味構造の分析を参考にするのは「物語が紙面上に創りあげる世界には多様性があり、それは現実の世界を研究する人間にとって柔軟性と幅を身につけさせてくれる」からだとして述べている（Latour 2005: 54-55）。グレマス自身は、この行為項モデルについて「その全体として捉えられるには大きすぎる意味世界を、人間にとって近づきやすい小世界に組織するための、可能な原理の一つとして考察された」と記している（Greimas 174 = 225）。

さて、グレマスは「この *actant* という用語をテニエールから借りている」と述べている（Greimas et Courtés, 1979, 1: 3）。テニエール（Lucien Tesnière, 1893-1954）はフランスの言語学者である。小泉保によれば、アリストテレス以来の西洋

の文法家たちの伝統的思考法は、文の中核は主語と述語であるという見方であり、したがって、文を解釈するには主語と述語に「分解する」方法をとるのであるが、テニエールは、「文の中核を述語とする文法を提示した」(小泉 2007: 109-110)。たとえば、「メアリーはジョンに小包を送った」という文では、「メアリー」は第一行為項 (actant)、「小包を」は第二行為項、「ジョンに」は第三行為項、「送った」は、(最上位の) 結節というもので「文の中心に位置し、文のさまざまな要素を結びつけて一つの束にまとめ、文の構造上の統一を確固たるものにしていく」(112)。こうした考え方によって、テニエールは行為項 (actant) を、「何らかの資格と手段により、単なる端役的な存在しろ、どんな消極的なやり方にしろ、過程に参加する存在ないし物である」と定義する (Ternière 1969: 102 = 102)。動詞は、文を文として結節するのであるが、その対象となるのは、この行為項と状況項である。「行為項は、形式的には名詞で、意味的には動詞と一体となっていて、『動詞の意味を完結するために』欠くことのできない成分であると規定している」(小泉 2007: 192)。³⁾つまり行為項 (actant) は、文のなかで名詞で表現されるものすべてを指すのである。

グレマスは、行為項モデルをさらに進めた別の論文では、まず「主体—主人公という行為項は、〈子〉という演者によって演じられるのに対して、送り手という行為項は、同時に演者〈父〉と演者〈司祭〉において演じられる。第四の演者、すなわち〈料理娘〉は反対者を演ずるが、だからといって反対者の機能がもっぱら彼女にだけ帰せられるというわけではない。むしろ反対者—反逆者は、〈娘〉と〈司祭〉とによって同時に語彙化されていると言えよう」。グレマスは、こうして分析を進めるなかで、もう一つの水準として「役 (role)」を加えている。「語りの働きは、ふたつのレベルではなく、三つの別々なレベルで行われるということになる。首尾一貫した機能的領域に対応する基本的な行為項の単位である役は、言述の単位である演者と、物語の単位である行為項のなかに加わる (Greimas, 1970: 253-256 = 301-304)。

テニエールからは、あらゆる名詞が行為項 (actant) として同じ水準に位置づけられることが明らかになったのであるが、グレマスは、物語の意味構造を探る方法

として、「役割 (role)」と「行為項 (actant)」と「演者 (acteur)」の三つの水準を区別している。カロンの論文において、アクターが出現したときに、互いに「役割」をもつようになるという指摘があったが、それは、このグレマスの区分に対応させることができるだろう。そのように考えれば、三人の研究者、同僚の研究者、漁民、ホタテ貝という四つのアクターは、いずれも顔が見えない存在である。グレマスは、文の意味構造を分析しているので、行為項 (actant) は、既に記述された物語のなかの名詞を指しているのであるから、カロンの分析は、ホタテの養殖の試みという物語のなかで、四つの行為項の関係性を論じているのである。

カロンは、上記の論文の注で actor を説明する際に、参考文献としてラトゥールの一九八四年の著作を挙げている。ラトゥールのこの本は、前半が「細菌の戦争と平和」と題するパスツールの分析で、後半は *irreduction* と題する ANT 論になっている (Latour 1984)。四年後に出版された英語版の巻頭で、ラトゥールは、英語版はフランス語版の増補改訂版であると記しているので、ここでは、この英語版をもとにして、ラトゥールのアクタン (actant) 概念を考えてみたい。ラトゥールは、この *reduction* の序文で、還元主義を批判し、第一章の冒頭では、アクタンを論じている。あらゆるものが相互に「還元できないもの」ならば、対象としてつかまえられるのは、二つの間の関係からであって、二つがあることではじめて、ひとつひとつが意味をもつ。このひとつをアクタンという。アクタンは「どんなに弱くても他のアクタンを招集することができて、それが加われば、次のアクタンも加わる。そうなれば、もつと容易に動くことができる。小さな渦ができて、他にもたくさん渦ができてきて成長をする。(中略) 消えてしまわなようにするには、本質はたくさん連合軍と関係するかもしれないし、関係も本質と関係をもつかもしれない。ひとつのアクタンは、他のアクタンと関係することによってのみ力を得ることができる」(Latour 1988: 159-160)。

二二、「ネットワーク」への含意

ネットワーク (réseau, network) という用語は、ANT の考え方がつくりはじめられた一九八〇年頃と近年とで、通常の言葉としての意味が異なっている。元は網

目という意味だけであつたが、ラトウールは、インターネットの利用が当たり前になった結果、元の翻訳や変形という意味が希薄になり、後者の運搬するという意味、どんな情報にも触れることができるという意味で理解されるようになった、と述べている。そして、ラトウールは、本来の意味としては「ドゥルーズとガタリのリゾーム概念に近いもの」であり、それは翻訳と変換という変形が続くことを意味していた。こうした意味は、社会学理論で使われてきた伝統的な用語では掴まえられなうものだとこう (Latour 1999: 15)。

「リゾーム (rhizome)」は、ドゥルーズとガタリが一九七六年にその書名で発表し、一九八〇年に『千のプラトー』の冒頭に収録した文章において中心的に論じられている概念である。宇野邦一によれば、リゾームとは、もとは「根茎」と訳される植物学の用語であつて、蓮、竹、生姜などに類するもので、地下を水平に伸びて広がり、その植物をあらゆる方向に増殖させる (宇野、二〇二二、一〇)。ドゥルーズとガタリは、リゾームを「樹木」と対立させる。樹木には中心 (幹) があり、根や枝は対称的に広がり、幹から枝、枝から小枝へと同じ形の分岐が繰り返される。ここには「秩序」と呼ばれるものの特徴が全て備わっている。しかしドゥルーズとガタリは、リゾームを対立的に位置づけたとはいえず、それが無秩序だとしているのではなく、「異質な規則や配列や運動によって定義される別の秩序 (多様体) でありうることを示している。そして、かれらは、文学、芸術、社会学などの領域、あるいは植物や脳、遺伝などに関するものまで引用し、「さまざまな領域で共通にあらわれていた〈異質な秩序〉を横断しながら、それを一つの連続性として並べ、リゾームによって結び合わせ、その連続体をしっかりと目に見えるものにする」ということを試みていた、という (宇野、二〇〇一、一七二—一七三)。「リゾームのどんな一点も他のどんな一点とでも接合されうるし、接合されるべきものである」 (Deleuze et Guattari: 13=23) とするのは、そうした結びつきを示した表現の一端であるといえるだろう⁽⁴⁾。

二二三、素材 (materials) と対称性

materialism も ANT の特徴のひとつである。カロンは、ANT が構築主義の系

列とは異なる点として、「社会の構成のなかで、人間以外 (nonhumans) にどのような役割を与えているか」という点を指摘する。伝統的な社会学の見方でも、たとえば中産階級の家に家具があるといったことなど、人間以外の存在を認めてはいらる。しかしその場合でも、せいぜい、「手を加えて作られたもの」「日常生活で必要なもの」とされるのが関の山であり、遺伝子、クオーク、ブラックホールなどと同じく「行為の文脈、脈絡を構成するもの」つまり「社会的な集合の外側に位置するものであつて、社会的な集合によって使われる道具」とされる。分析課題が制度、組織、規則、手続きなどの場合には、そうした個人を越えた実在物は、人間が作ったものであり、日常生活に追加される人工物である。社会学は、このような人間と人間以外という大きな区別、存在論的な非対称性の上に築かれている、と述べている (Callon 2001: 64)。ANT は、そうではなくて、対称性をもとに分析する立場であり、人間と人間以外を同じように扱う。たとえば、冒頭で紹介したカロンの論文では、漁民とホタテ貝が同じようにアクターとして分析されている。

このように ANT が対称性を意識するのは、科学社会学における考え方をもとにしている。ロウは、「対称性を主張するのは、すべてが説明に値するし、とりわけ、説明ないし記述しようとするすべてを同じ方法で研究すべきであるからだ」という。その理由は簡単で、「どんな研究を始める時でも、何かに、誰かに特権を与えようとは思わないし、とりわけ、まったく説明する必要のないような現象を想定して研究をはじめようとは思わないからである」。そしてロウは、ブルアが述べた対称性に言及している (Law 1994: 9-10)。ブルアは、科学的知識の社会学が持つべき原則として、因果性、不偏性、対称性、反射性の四つをあげている。対称性とは「説明の方法が対称的であること。たとえば、正しい信念と間違つた信念は、同種の原因によって説明されるべきである」 (Bloor 1991: 7=7)。

ロウは、対称性について、真も偽も、少なくとも一部分は社会的な産物であり、いずれも同種の要因によって生まれるだけでなく、その判断基準も社会的なものであり、時間の経過のなかで変化するものであるから、集団によつても変わっていく。もしも、最初からある知識は真で他のどれかが偽であるとしてしまえば、真と偽の区分がどのようにして作られ使用されたのかは分からないままになるの

である。ロウは、こうした科学をめぐる知識社会学における対称性の問題について、行為者である人間と、技術によってできたものや自然のものの区別という ANT の中心的な考え方に話を展開する。そんな区別は自明のことで、ばかげたことだ、と言われるだろうが、自分たちは、そのばかげたことだというところで立ち止まって考える。どうして、そうした区別が、いろんなものの性質によって所与のものと確信しているのだろうか。もしも、その区分をひとつの作用、ordering の産物だと考えればどうなるのだろうか、とロウは問う。ここからこそ、どのようにして、機械は機械となったのかを探りはじめることができるし、あるものを人間ではなくて機械と名付けるということは何を意味するのかを探ることができる、というのである。これは、主体とは何かという現代の社会理論にかかわる問題であり、たとえば、フーコーが主体とはある作用の産物であると述べていることにロウは言及している (Law 1994: 10-11)。

対称性に関して、ロウは、もうひとつのことにも言及する。それは微視社会的と巨視社会的という区分である。機能主義やマルクス主義とシンボリック相互作用論を対比すれば分かるように、社会学では大と小を区分してきた。しかし、ロウは、こうした大小といった比較や大きさも、エリアス、ギデンズ、ブルデューらも気づいているように、ひとつの作用であると指摘する。この区分も所与のものではなくて、むしろ研究の対象なのである (Law 1994: 11)⁽⁵⁾。

しかし、対称性をめぐっては議論がある。リンチは、対称性と不偏性を「ひとまとめ」にして論じているが、たとえば、科学的な実験などで、その手続きや判断基準について当該メンバー (科学者) の説明を使わざるを得ないことがあるが、それが理解できないほど難しく、「歴史家や社会科学者の物語に取り込むのはさらに難しいことがある」。こうした場合に「社会学者は、記述された技術に含まれている党派的な関わりから距離を保ちつつ、専門的で妥当な記述を行おうとすると、極めて大きな責任を負ってしまうことになる」(Lynch 1993: 80=97-98)⁽⁶⁾。リンチは「新しい科学知識の社会学の興隆」の一つの立場としてラトゥールらの ANT についても批判的に言及しているが、ANT は「科学とは何かについてのアブリオリな理解を原則として保留しようとしてきた」と述べている。そして、そうした AN

T の考え方を検討してみると、「実際の」ものごとの観察や記述や説明をするとはどういうことかを再考させられるのである。私が理解するところによると、これがエスノメソドロジーの問題設定なのである」と述べている (Lynch 1993: 113=132-133)。リンチの議論は、ANT をとおして、エスノメソドローに戻るのである⁽⁷⁾。

リンチは、「エスノメソドロジーを一言でまとめるとすれば、社会的実践とその説明との系譜的関係を探究するひとつの方法である」と述べている (Lynch 1993: 1-3=15-17)。そして、エスノメソドロジストが『「社会的現実」がもっている安定的で人を制約し誰にも分かる合理的で秩序ある特性というものが、その場で達成されつつあるものである』ことを強調するのに対して、(ANT を含む) 科学知識を研究する社会学者たちは『「自然的事実」が社会的構築であると主張する』。こうした明らかな対比を示した上で、リンチは両者の共通点を指摘する。それは「当たり前のことだと受け止められている事実というものが、どのようにして、人びとが協力して行う活動から生じるのかを示そうとする」とこと「事実というものが、合理的な探究方法を通して論証された超越的な自然的秩序の現れである」という考えはつきりと拒否する」ということである (Lynch 1993: 265=307)。このうち前者の指摘は、ガーフィンケルが『「エスノ」という言葉は、ある社会のメンバーが、彼の属する社会の常識的知識を『あらゆること』の常識的知識として、なんらかの仕方で利用することができるということを指すらしい』とか「ばくがある出来事の説明可能な特徴や説明について語るときは、日常的なあらゆる状況にいるメンバーが、その場面にあった実践を行なうことができるということを言おうとしている」(Garfinkel: 16-17=16-18) と回顧しているのと重ね合わせることができるであろう。

二一四、「翻訳」とミッシェル・セール

最初に取り上げたカロンの論文では、四つの局面が描かれ、これらがひとつの「翻訳」の過程であることが示された。この翻訳 (traduction) というのも、ANT の重要な概念である。ロウは次のように述べている。ミッシェル・セールは、秩序と無秩序の境界こそが最も興味深い場所であると述べたり、そうした場所を行き交

う使者を創造したりもしている。そうしたたくさんさんのセールの暗喩のひとつとして「翻訳」がある。「翻訳する」ということは、ふたつの言葉を同義とすることであるが、同義であるような言葉はないのだから、翻訳には裏切りという意味が潜んでいて、翻訳は裏切りであるという文句もある。したがって、翻訳とは、同義なものを作り出すことであると同時に、移行することでもある」(Law 2009:144)。

ミッシェル・セール (Michel Serres, 1930-) は、フランスの哲学者である。ラトウルは、かつてセールに学んだこともあり、二人の対談をまとめた著作もある (Serres 1992)。そのなかで、セールは「わたしが叙述しているのは諸関係だけです」と語る。「諸関係の一般的理論」ないし「前置詞の哲学」であると言う (Serres 1992:186=189)。「間 (entre)」に位置する空間と時間については「干渉」(Serres 1972)、「とともに (avec)」で表現される関係については「コミュニケーション」(Serres 1969) や契約 (『自然契約』Serres 1990)、「…を通して (à travers. . .)」は『翻訳』(Serres 1974)、「…の傍らに (à côté de. . .)」は『寄生者の論理』(Serres 1980) という具合である (Serres 1992:151=152)。「コミュニケーション」『干渉』『翻訳』に『分布』(Serres 1977=1990)『北西航路』(Serres 1980)を加えた5冊には「ヘルメス」というシリーズ名が付されている。ヘルメスとは、ギリシア神話において「道路と四つ辻の神、メッセージと商人の神」である (Serres 1968:10=11)。「ヘルメスは、通過し、姿を消します。方向＝意味を定めて、それを破壊し、音やメッセージや言語を提示し、文字表現を、いやその前に音楽を発明し、そして翻訳とその障害物とを発明します」。セールは、自身の研究について、安定した体系や歴史を記す動詞や名詞で表現するのではなく、「さまざまな関係やつながりを表すある種の揺れ動く地図、まるで氷河の浸透流域のような地図」を描く作業をしているのだと言い、「ヘルメスのようにつながりからつながりへ、結び目からほどけ目へと跳び移っていく」ような描き方をしているのだとも述べている。「ヘルメスはいたるところを通るわけで、すべての場の固有の細部まで、その特異なところまで、行きわたるのです」。そして、自分がつくろうとしているのは「一つのシステムではなく縫い合わせ、波の動く合流点」、「乱流」、「藁の結び目」あるいは「炎のゆらめき」であるという。ヘルメスは持っている杖で、一つの方角性を示しつ

つ、伝達者として受信者のほうへ急ぎながら、彼だけのもつ「移動＝翻訳 (translation)」とプロペラや渦巻きなどの一連の回転とを一度に叙述できる前置詞の「方へ (ver)」を携えて、進んでいくのです」(Serres 1992:153-180=157-184)。

松浦寿夫は、セールの翻訳という概念について、『北西航路』に寄せて、多島海を巡航する航路として説明している。島同士が「翻訳という関係」にあるというのは、類似しているということではない。「翻訳の関係」は「二つ以上の島が構造的な同型性をそなえているということ」を前提としている。そして、この島々が分布している空間に翻訳という名の航路を描くには、「この同型性がどのような変換の仕組みによって外面的に改装されているかに明晰に反応し、類似的な項の対応に安易に充足してしまうことのないように務めねばならぬ」という。類似的な対応という意味では、ふつうに翻訳という場合、先にあるテキストが、改変をへながらも、もう一つのテキストに「ある一定の意味内容が同型性を保持したまま移しかえられる」ことを指すのであるが、セールの翻訳概念は、そうではない。「同時に共起する二つの構造の、同型性を介した通路のことなのだ」という。「翻訳という関係において、その関係を形成する二つのテキストの個的な特殊性は二次的なものにすぎず、むしろ、この関係こそが前景にせりあがってくる」と指摘する(松浦、二二二二三)。

セールも、「網の目 (égéa)」という表現をよく用いる。それは「ひとつの流動的な状況、つまり時間がたつにつれて全体的に変化していく状況を形式的に表現することが問題であると考えている」からである。「網の目をした図は、もろもろの命題と出来事の空間的展開や分布によって、ひとつの状況―理論的または現実的な―を表す。こうした展開の中で、こうした分布のただ中で、状況の交換、決定の流れの変動、局所的な部分集合の合体等が生ずる。これらの交換、変動、合体は、空間(ある時点における網の目の分化はここから生まれる)の中でも、時間の中でも起る。したがって、あえていえば、時空の中における状況の転換、つまり全体的な進展が存在する」。「諸頂点をつなぐ結びつきが多様であることから、^{レトロアクション} 遡及作用という観念、すなわち原因に対する結果の直接的反作用という観念が必然的に生ずる、というよりむしろ、送り手である頂点に対する受け手である頂点の遡及作用と

いう観念が必然的に生ずる。因果的な流れはもはや因果的にはならない。因果性はもはや不可逆性ではないのだから。つまり、影響を与えようとしている側が、その影響の結果によって全く突然に影響を受けるのである」。(Serres 1968: 11-35 = 2-13)。

三、結 び

ここまで、アクターネットワーク論の主要な概念を検討してきた。

「アクター」は言語学に由来する。テニエールが使ったアクタン (actant) という概念は、述語ではない部分で使える意味の素であり、主語になったり目的語になったりするものである。人間であるかそうでないかという区別はなく、すべて名詞であるという意味で同等である。そうした要素を指す用語としてアクタンが使われている。アクタンとアクターとは区別できるし、アクタンのほうが ANT の本質を示す用語であるといえるだろう。

「ネットワーク」と網の目である。異質な素材の結びつきである。おのおののアクタンは相互に結びつくことによって意味や力をもつことになる。

「対称性」には、人間と人間以外を区別せずに、すべて素材としてとらえるという考え方が表明されている。事実といわれるものが、どのような手順で立ち現れてくるのか、人はどのようにして人とされるのか、ある素材が「もの」の意味をもつのはどのような過程を経てなのか、ということを考えようというのである。

ANT はグレマスとガーフィンケルを合わせたものだ、とラトゥールは述べている。彼はこの二人を、大西洋の両岸における知的活動として高く評価している。そして、両者の考え方を合わせたという ANT は、ガーフィンケルが対象とした当事者 (登場人物) が述べる説明と、グレマスが対象とした物語がその全体の構造として語っていることから、この両者の相互関連を探る方法である、とラトゥールは記している (Latour 2005: 54-55 注)。

ANT の基本的な考え方のなかで「翻訳」という概念は大切である。ここには、ミッシェル・セールの考え方に由来するものが多分にある。…の間に、…と共に、

…の傍らに、など、フランス語や英語の前置詞を手がかりに、セールは「諸関係の一般的理論」を考察してきたという。何かと何かの関係を考えるとということが「翻訳」である。アクタンは、正しくそういう概念である。

「翻訳」だけではなく、ANT にはセールの考え方と重なり合うところが多分にあるといえるだろう。関係性、あるいは結びつきを「結び目」として考えてみよう。結び目が集まって網目がつくりだされている。常識的には余りに多くの結び目を取り上げて考察することはむずかしいので、何らかの意味で主要なものだけを取り上げる。伝統的な社会学は「個人」や「集団」などの分かりやすい結び目に着目し、そういう結び目があることを前提として、あるいは出発点として、網の目から構成されている網の全体を説明しようとする。いっぽう、セールは、ANT は、いろいろな結び目のひとつひとつを意識しようとする。それは網の全体に及ぶ考察にはならない。ひとつひとつの結び目がどのように結ばれているのか、そして、それがほどこけるのは、どのようにしてであるのか、ということに関心を持つ。カロンの例でいえば、ホタテ貝の養殖は、三人の研究者がやってみようとしたことではあるが、その湾の漁師がどう関わるのかという人と人との関係だけで、ものごとが運ばれるわけではなくて、どれだけの稚貝が実際に成長したのかということも、その結果が文書にまとめられて関係者を説得するということも、この試みを的確に描くには必要なことである。別の言い方をすれば、三人の研究者と「黙ったまま」のホタテの稚貝、そして無闇に手を出さない漁師というアクタンが相互に結びつかなければ、養殖の試みという事実は生まれなかったのであるし、実際にそうであったように、このいずれかが別の動きをすれば、すぐに終わってしまうのである。「社会現象」というものは、そのように解釈することができるし、さらにいえば、そのような解釈のほうが、ものごとの運びを的確に表現することになるのではないか。人と人との関係にだけ注目しているだけではすくいとれないものが、すくいとれるのではないか。その意味で、セールが前置詞に焦点を当てて考えていることは興味深い。ANT が、意識的にそうしているのではないのだろうが、言語による表象という意味では、文のなかのあらゆる部分が対象を描き出しているのであるから、どの部分も読み落とすことはできないのである、というような解釈を試みてみる。

る。というのも、経験的な調査による知見も、小説などのフィクションと同じように、テキストとしてまとめることになる。テキストにまとめる際に、人と人との関係だけではなくて、対象とするものごとには、もっとさまざまな素材が関係しているのであるから、それらも描くというのがANTの考え方なのである。

冒頭では、カロンのによるANTの定義を引用したが、ここでは、ロウによる定義を引用しておきたい。

actor network theory (ANT) は、社会を分析する研究法のひとつであり、次の六つの仮定に基づく。第一に、制度、実践、行為者を異質な素材からなっているとして扱う。つまり、それらは人間だけではなく、技術や他の素材によっても成り立っているとして扱う。第二には、実践を構成する要素は相関的なもので、そのかたちや属性は他の要素との相互作用によって達成される。この相互関係の網の目の外には固定されたものは何もないし、現実というものもない。第三に、相互に異質な素材の関係と実践は、過程としてある。構造も制度も現実も、絶えず生じていなければ消失してしまう。第四に、現実や構造は、実践上はそうでなかったとしても、原則的には不安定なものである。第五に、この考え方は世界は別のものである可能性を開き、政治への関心に導く。第六に、さまざまな現実が生じたり続いたりしていることについて、何故ではなくて、どのように、と探究する。それは、明白な社会的要因も、それ自体が相関的な結果であって変化するからである (Law 2006: 4)。

ロウは、続いて、ANTがいろいろな批判を受けることに関していくつかの要因をあげているが、その一つとして、第六の仮定に関連して、次のように述べている。「ANTは、いろんな制度というものがかたちを成すということについて、なぜ (why) とどう (how) よりも、どのようにして (how) という説明を提供するので、説明力が弱いと批判される」(Law 2006: 6)。ロウが別のところで記しているように、そもそもANTの考え方は「英語圏の社会学」とはかけ離れたものである (Law

2006: 5)。

冒頭で取り上げたカロンの論文は、ホタテ貝の養殖を試みるという出来事的一端が描かれているに過ぎない。養殖を試みるということは、どのようにして可能になり、また挫折するのか。それを描くために四つのアクタンが選ばれ、それらの関係だけが論じられる。伝統的な社会学であれば、この出来事に関連した他の重要な集団や個人や「地域特性」などを指摘するであろうが、カロンはそれらについてはほとんど言及しない。四つのアクタンは、この物語の登場人物ではないので、常識的な意味での出来事の詳細はほとんど語られない。稚貝の数など養殖の詳細、会議で報告された資料の内容も文面も、研究者の発言の内容も書かれていない。勝手にホタテ貝を獲ってしまった漁師の意見も取り上げない。描かれているのは、少しずつ関係が作られやがて破綻する四つのアクタンの関係性だけである。四つのアクタンの関係性に、この出来事の本質があるのではないかという解釈である。

たとえばいえば、ある劇場で上演される芝居について、その芝居の筋というような凝縮された、集約された説明をするのではなく、その芝居が企画されて実際の舞台の上で上演されるまでにどう展開されていくのかを描こうとする手法である。台本がつくられ、稽古の間に演出家が俳優たちにどう指示をしていくのか、宣伝用のポスターにはどんな写真や見出しが使われるか、実際に公演がはじまって舞台装置、音響、照明、俳優の衣装、化粧はどのようなものか、そして台詞や舞台の上での動き、観客の反応など。そうしたひとつひとつの素材が互いに関係することで、そこに物語が展開されていくのだと考える。そうした異質な素材のあいだの関係性を説明することで、芝居(物語)の本質の一端をとらえようとする方法である。

縷々「アクターネットワーク論」について考えてきた。そもそも、Actor network theory というものがひとつの理論として明確に存在しているのではなく、中心人物である三人の研究もそれぞれである。他の研究者も、それぞれかなり違った方法で議論を展開している。ロウが指摘しているように、アクターネットワーク論とは「単一の理論とみられるよりも、ひとつの工具セットであり、方法論上の感性として受け止める」ようなものかもしれない (Law 2006: 4)。

筆者は、アクターネットワーク論の「社会」観が、「地震」という現象をとらえるのに親和的であると考えてきた。私たちの日常は、いろいろな素材の結びつきと離反による過程だと考えれば、地震は、突如として離反が生じ、同時に新しい結びつきがはじまる過程として解釈することができる。これまで筆者が記してきた避難所と呼ばれた場所では、避難してきた人たち、学校の関係者、配達される弁当、配られる日用品、さまざまなお知らせ、などなど、多様な素材が「避難所」というひとつの結び目をつくりあげていた。そうした素材との結びつきのなかで、外から入り込んだ大人の男性である筆者のような人間は「ボランティア」という立場をつくりあげ、避難所という空間（結び目）を、余計に複雑なものにしていった。さらには、地震というものについて、日本では古代から夥しい資料が書き残されているし、構造物もそれに対応するようにつくられてきた。そして、近代科学は、地面を構成する物質とその動きに関する膨大な資料を収集して、地震という現象とその発生を説明しようとしている。地震というひとつの現象を考えてみても、多様な素材の結びつき、結び目として描くことができるのである。

ものごと、あるいはものごととの運びは、ひとつひとつの「結び目」にこだわらずにやさしく描くこともできるが、そんなにやさしく描くことができるものではない、ということもできる。

(二〇一四年一月二六日)

注

- (1) カロンは一九七六年に書いた論文 (Callon 1976) のなかで、ネットワーク (réseau) と翻訳 (traduction) の概念を用いて、科学の社会学の新しい方法を提案している。
- (2) これに直接関連するのではないが、ジェイムソンは次のようにも指摘している。「彼「グレアム」は、理解というものは、たとえそれが通時的出来事を対象とする場合でも、本質的に共時的プロセスであるとする。したがって、われわれが概念的に歴史をかりに『把握する』ことができるのであれば、その限りにおいてそのような把握は真の通時態を共時的条件項に翻訳するという形を取ったにちがいないということになる」(Jameson 1972: 188 = 197-198)。
- (3) こうして「テニエールは、文すなわち動詞結節を小さなドラマに喩えている。動詞が筋書きで、俳優が名詞、その衣装が形容詞で、背景は副詞に相当するといふのである。

動詞の筋書きによって、名詞の俳優の役割と人数が決まる。俳優が筋書きにしたがって、演技することにより、ある出来事が展開される。こうしたドラマが言語表現では文の意味にあたる。俳優に代わる名詞を行為項と呼び、舞台装置を表す副詞の状況項と区別される」(小泉 2007: 191)。

- (4) 興味深いことに、ドゥルーズとガタリは、注で、セールの『翻訳』に言及している。「セールが実にさまざまな科学の領域における樹木の多様性やシークエンスを分析している——いかにして樹木は一個の『網目』から出発して形作られるか、ということ」(Deleuze et Guattari, 25 = 343)。

- (5) ラトゥールも社会学者は「二つの大きな不満」を交互に感じてきたことを記している。

最初の不満は、顔と顔を付き合わせたやりとりや特定の場所の「微視的な」研究に没頭していると、「その状況を説明するのに必要な要素の多くが、もう既にその場所にあったものか、そうでなければ、外から持ってこないといけないものだということに、簡単に気づく。したがって、その場にはない要素、別の水準の要素を探して、研究している場所では直接みえないけれど、その状況を成立させている何かを一生懸命に探す。こうして、これまで社会や規範、価値、文化、構造、社会的な文脈などの概念というものに多大な労力が払われてきた。それは、こうした概念が、微視的水準の状況に形を与えるものだからである。しかし、社会学者は、自分の議論が異なる水準に移ってしまったことで、次の不満を感じる。『そこにも何か欠けている、文化や構造、規範、価値といった用語を使って抽象化するのはいくらでもないか、と思いはじめる。そして、反対の動きをして、出発点であった血肉の通った場所に戻るのである。しかし、そこに戻ると、すぐにまた落ち着きをなくし、社会構造のほうに向かうとする。社会学者は、特定の場所というの、いわゆる『巨視的』水準と同様に、抽象的なものであることに気付くのである。』ラトゥールも、ロウと同じく、ANTの考え方は、この二つの不満足を解消したり克服することではなくて、こうした不満がどのような条件で生じるのかを探索することだという。そして、そもそも社会過程といったものは、「主体と構造」から成り立っているのではなくて、「動き回っている」存在ではないだろうか、という。「ひとつの弾道、ある動き、といったものを、それらとは何の関係もない巨視的と微視的、個人と構造といった二つの対立する概念を用いて描こうとした結果である」(Latour 1999: 16-17)。
- (6) いわゆる「サイエンス・ウォーズ」において、ラトゥールの論文も取り上げられた(Social and Brimont 1998 = 2000)。そのいきなひは、金森修が詳しく紹介している(金森、一九九六)。
- (7) ラトゥールは、かつてリンチが、呼称について、actor network theory であり、actant-thizome ontology のほうがいいのではないかと書いたと記している (Latour 1999: 19)。このほうが「正確」であるのかもしれない。

文献

(引用は、必ずしも下記の翻訳書のとおりではない)

- Barry, Andrew, 2006, Actor-Network Theory, in Harrington A., Marshall, B. I., and Muller, H. eds., *Encyclopedia of Social Theory*, Routledge.
- Bloor, David, 1991 (1976), *Knowledge and Social Imagery*, University of Chicago Press. (デヴィッド・ブロー『数学の社会学—知識と社会表象』佐々木力・古川安共訳、培風館、一九八五年)
- Callon, Michel, 1976 "L'operation de traduction comme relation symbolique", Roqueplo, P. ed., *Incidence des rapports sociaux sur le developpement scientifique et technique*.
- Callon, Michel, 1980 "The State and Technical Innovation : a Case Study of the Electric Vehicle in France", *Research Policy*, vol.9.
- Callon, Michel, 1986 a "Some Elements of a Sociology of Translation : Domestication of the Scalops and the Fishermen of Saint Brieuc Bay," in John Law ed., *Power, Action and Belief: A New Sociology of Knowledge?* Sociological Review Monograph 32. Routledge & Kegan Paul.
- Callon, Michel, 1986 b The Sociology of an Actor-Network : The Case of the Electric Vehicle, in Callon, Michel, Law, John and Rip, Arie eds., *Mapping the Dynamics of Science and Technology : Sociology of Science in the Real World*, Macmillan.
- Callon, Michel, 1999, Actor-network theory — the market test, in John Law and John Hassard ed., *Actor Network Theory and after*, The Sociological Review Monograph, Blackwell.
- Callon, Michel, 2001, Actor Network Theory, in N. J. Smelser and P. B. Bates eds., *International Encyclopedia of the Social and Behavioral Sciences*, Elsevier.
- Callon, Michel, 2006, Sociologie de l'acteur réseau, Madeleine Akrich, Michel Callon, Bruno Latour ed., *Sociologie de la traduction : Textes fondateurs*, Presses des Mines.
- Callon, Michel, and Latour, Bruno, 1981 "Unscrewing the Big Leviathan : How Actors Macro-structure Reality and How Sociologists Help Them To Do So," in K. D. Knorr-Cetina and A. V. Cicourel (eds.), *Advances in Social Theory and Methodology : Toward an Integration of Micro- and Macro-Sociologies*, Routledge & Kegan Paul.
- Deleuze, Gilles et Guattari, Felix, 1980, *Mille Plateaux : Capitalisme et schizophrénie*, Minuit. (ドゥルーズ・ガタリ『千のプラター(上・中・下)』宇野邦一ほか訳、河出文庫、二〇一〇年)
- Garfinkel, Harold, 1974, The Origin of the Term "Ethnomethodology" in Roy Turner ed., *Ethnomethodology : Selected Readings*, Penguin. (ハロルド・ガーファマンケル「エスノメソロジー(命名の由来)」山田富秋ほか編『エスノメソロジー—社会学的思考の解体』せりか書房、新装版、一九八七年)
- Greimas, A. J., 1966, *Sémantique Structurale-Recherche de Méthode*, Larousse. (A・J・グレイマス『構造意味論—方法の探究』田島宏・鳥居正文訳、紀伊國屋書店、一九八八年)
- Greimas, A. J., 1970, *Du Sense, Seuil*. (A・J・グレイマス『意味について』赤羽研三訳、水声社、一九九二年)
- Greimas, A. J., 1983, *Du Sense II*, Seuil.
- Greimas, A. J. et Courtés, Joseph, 1979, *Sémiotique : Dictionnaire raisonne de la theorie du langage*, Hachette.
- Jameson, Fredric, 1972, *The Prison-House of Language*, Princeton University Press (フレイミング・ジェイムソン『言語の牢獄 構造主義とロマン・フォールミズム』川口喬一訳、法政大学出版局、一九八八年)
- Jameson, Fredric, 1981, *The Political Unconscious*, Cornell University Press (2002 Routledge) (フレイミング・ジェイムソン『政治的無意識—社会的象徴行為としての物語』大橋洋一ほか訳、平凡社ライオンライリー、二〇一〇年)
- Law, John, 1986 "On the Methods of Long Distance Control : Vessels, Navigation and the Portuguese Route to India," in J. Law ed., *Power, Action and Belief : A New Sociology of Knowledge?* Sociological Review Monograph 32. Routledge & Kegan Paul.
- Law, John, 1992, Note on the Theory of the Actor-Network : Ordering, Strategy, and Heterogeneity, *Systems Practice*, 5-6.
- Law, John, 1994, *Organizing Modernity*, Blackwell.
- Law, John, 1999, After ANT : complexity, naming and topology, in John Law and John Hassard ed., *Actor Network Theory and after*, The Sociological Review Monograph, Blackwell.
- Law, John, 2006, Actor Network Theory, in B. S. Turner ed., *The Cambridge Dictionary of Sociology*, Cambridge University Press.
- Law, John, 2009, Actor Network Theory and Material Semiotics, in Bryan S. Turner ed., *The New Blackwell Companion to Social Theory*, Wiley-Blackwell.
- Latour, Bruno, 1984, *Les Microbes : guerre et paix, suivi de Irreductions*, A.-M. Métailié.
- Latour, Bruno, 1987, *Science in Action : How to Follow Scientists and Engineers through Society*, Harvard University Press. (ブルーン・ラトゥール『科学が作られたところ—人類学的考察』川崎勝・高田紀代志訳、産業図書、一九九九年)
- Latour, Bruno, 1988, *The Pasteurization of France*, Translated by Alan Sheridan and John Law, Harvard University Press.
- Latour, Bruno, 1990, Drawing Things Together, in Michael Lynch and Steve Woolgar eds., *Representation in Scientific Practice*, The MIT Press.
- Latour, Bruno, 1999, On recalling ANT, in John Law and John Hassard ed., *Actor Network Theory and after*, The Sociological Review Monograph, Blackwell.
- Latour, Bruno, 1993, *We Have Never Been Modern*, Translated by Catherine Porter, Harvard Uni-

- versity Press. (ブルノー・ラトゥール『虚構』の近代—科学人類学は警告する—川村久美子訳、新評論、二〇〇八年)
- Latour, Bruno, 1996, *Aramis, or the Love of Technology*. Translated by Catherine Porter, Harvard University Press.
- Latour, Bruno, 1999, *Pandora's Hope – Essays on the Reality of Science Studies*. Harvard University Press. (ブルノー・ラトゥール『科学論の実在—パンドラの希望—川崎勝・平川秀幸訳、産業図書、二〇〇七年)
- Latour, Bruno, 2005, *Reassembling the Social : An Introduction to Actor network theory*. Oxford University Press.
- Latour, Bruno, and Woolgar, S., 1979, *Laboratory Life : The Social Construction of Scientific Facts*. Sage.
- Lynch, Michael, 1993, *Scientific Practice and Ordinary Action*. Cambridge University Press. (ブイケル・リンチ『エスノメソドロジーと科学実践の社会学』水川善文・中村和生監訳、勁草書房、二〇一二年)
- Serres, Michel, 1968, *HERMES I. La communication*. Minuit. (ミッシェル・セール『ヘルメス 1 コミュニケーション』豊田彰・青木研二訳、法政大学出版局、一九八五年)
- Serres, Michel, 1972, *HERMES II. L'interference*. Minuit. (ミッシェル・セール『ヘルメス 2 干渉』豊田彰訳、法政大学出版局、一九八七年)
- Serres, Michel, 1974, *HERMES III. La traduction*. Minuit. (ミッシェル・セール『ヘルメス 3 翻訳』豊田彰・輪田裕訳、法政大学出版局、一九九〇年)
- Serres, Michel, 1977, *HERMES IV. La distribution*. Minuit. (ミッシェル・セール『ヘルメス 4 分布』豊田彰訳、法政大学出版局、一九九〇年)
- Serres, Michel, 1980, *HERMES V. Le passage du Nord-Ouest*. Minuit. (ミッシェル・セール『ヘルメス 5 北西航路』青木研二訳、法政大学出版局、一九九一年)
- Serres, Michel, 1980, *Le Parasite*. Grasset. (ミッシェル・セール『パラジット—寄食者の論理』及川馥・米山親能訳、法政大学出版局、一九八七年)
- Serres, Michel, 1981, *Genèse*. Grasset. (ミッシェル・セール『生成—概念をこえる試み』及川馥訳、法政大学出版局、一九八三年)
- Serres, Michel, 1992, *Éclaircissements : Cinq entretiens avec Bruno Latour*. Editions Francois Bourin. (『解明 M・セールの世界—B・ラトゥールとの対話』梶野吉郎・竹中のぞみ訳、法政大学出版局、1996 年)
- Tesnière, Lucien, *Éléments de Syntaxe Structurale*. Deuxième édition, 1969, Editions Klincksieck. 初版は一九五九年 (ルシアン・テニエール『構造統語論要説』小泉保監訳、研究社、二〇〇七年)
- 足立 明、二〇〇一年、「開発の人類学—アクター・ネットワーク論の可能性—」『社会人類学年報』二七
- 宇野邦一、二〇〇一年、『ドゥルーズ—流動の哲学』講談社
- 宇野邦一、二〇一二年、『ドゥルーズ—群れと結晶』河出書房新社
- 大浦康介、二〇〇四年、「フランス構造主義」小森陽一ほか編『岩波講座 文学 別巻 文学理論』岩波書店
- 大塚義樹、二〇〇六年、「ハイブリッドの社会学」上野直樹・土橋臣吾編『科学技術実践のフィールドワーク—ハイブリッドのデザイン—せりか書房
- 春日直樹、二〇一、「人類学の静かな革命—いわゆる存在論的転換」春日直樹編『現実批判の人類学—新世代のエスノグラフィへ—世界思想社
- 金森 修、一九九六年、「科学の人類学」『現代思想』二四—六 (金森 修、二〇〇〇年に所収)
- 金森 修、二〇〇〇年、『サイエンス・ウォーズ』東京大学出版会
- 小泉 保、二〇〇七年、『日本語の格と文型—結合価値論にもとづく新提案』大修館書店
- 篠田浩一郎、一九八二年、「フランス記号学の展開」川本茂雄ほか編『講座・記号論 1 言語学から記号論へ』勁草書房
- 清水高志、二〇〇四年、『セールの創造のモナド—ライブニッツから西田まで』冬弓舎
- 清水高志、二〇〇九年、『来るべき思想史—情報／モナド／人文知』冬弓舎
- 清水高志、二〇一三年、『ミシェル・セール—普遍学からアクター・ネットワークまで』白水社
- 平川秀幸、二〇〇二年、「実験室の人類学—実践としての科学と懐疑主義批判」金森 修・中島秀人編著『科学論の現在』勁草書房
- 松浦寿夫、一九八五年、「形の源泉」『現代思想 (増頁特集) ミッシェル・セール』一三一—〇、青土社
- 松本三和夫、二〇〇九年、『テクノサイエンス・リスクと社会学—科学社会学の新たな展開』東京大学出版会

How 'Actor Network Theory' describes 'society' :

A Sociological Study of the Earthquake (4)

HARADA Takashi

要約：地震に関する考察の一環として、本稿では、アクターネットワーク論（ANT）の考え方について検討する。ミッシェル・カロン、ブルーノ・ラトゥール、ジョン・ロウの三人を中心とするこの考え方は、一九八〇年頃に形成されはじめた。

ANT には、アクター、ネットワーク、素材、翻訳といった鍵概念がある。アクターは、フランスのグレマスの記号論に由来するもので、その原型である *actant* は、フランスの言語学者テニエールの概念で、物語のストーリーの背景にある要素として考案されたものである。ネットワークという概念は、一九八〇年頃には、網の目という意味でしか使われていなかったが、近年は、情報関係の使われ方により、単なる運搬という意味で理解されるので、ラトゥールは、むしろドゥルーズとガタリのリゾームという言い方のほうがしっくりする、と述べている。翻訳という概念は、フランスの哲学者ミッシェル・セールの考え方によるものであるが、記号論、意味論のなかに、日本語で「転化」と訳されている *translation* の概念がある。要するに、「原文」が、その意味を保ちつつ、別の原語に置き換えられるという、一般的な翻訳というものではない。ANT は「翻訳の社会学」とも呼ばれており、翻訳は重要な概念である。

以上のように、ANT の考え方はフランスの記号論と哲学を背景にして作り上げられてきたといえることができる。また、ANT は、エスノメソドロロジーに近い考え方でもあり、ラトゥールは、ANT はグレマスとガーフィンケルによるところが大きいと述べている。

さて、地震に関する考察として ANT を参考にするという意味はどこにあるのだろうか。地震によって生じる事態は、目に見えて、いろいろな素材（*material*）が錯綜したものである。通常は、あるかたちで結びついているかにみえていたものが、一瞬のうちに、その結びつきを変えてしまう。また、地震を理解するために、さまざまな研究がなされ、震源や地下の構造、周期などの資料が集められ、科学的な説明がなされるようになったのであるが、その過程にも、さまざまな素材が関係している。

Abstract : This is the fourth part of a research project on a sociological study of the earthquake. In this paper, I focused on the Actor Network Theory (ANT). ANT is, according to John Law, 'a family of material semiotic tools, sensibilities, and methods of analysis that treat everything in the social and natural worlds as a continuously generated effect of the web of relations within which they are located'. Michel Callon, Bruno Latour and John Law started this methods of research at around 1980.

There are several key concept in ANT such as 'actor', 'network', 'materials' and 'translation'. 'Actor' is English word for french 'actant' which derives from semiotician A. J. Greimas. But it is originally a concept of French Linguist L. Tesnière. So, as Greimas states in his semiotic analysis, 'actor' designates 'materials' including humans and non-humans. 'Network' was at first used for suggesting relational effects of materials. Recently the meaning of the word has drastically changed because of the expansion of Information Technology. Latour stated that he prefer use what G. Deleuze and F. Guattari call "rhizome". 'Translation' is a concept of French philosopher M. Serres. It suggests the relational effects of differences. John Law suggested that since ANT's approach 'is non-humanist it analytically privileges neither people nor the social, which sets it apart from much English-language sociology'.

For the research project on a sociological study of the earthquake, ANT is appropriately useful : earthquake is a moment when almost all the relations among materials we take for granted suddenly change. This point of view offers us a alternative interpretations of our 'social life'.